

▶ みやぎシネマクラドルってどんな会？

みやぎシネマクラドルは、宮城県を主な拠点に、映像を通して作り手と市民が繋がり支え合うためのコミュニティとして2015年4月に始まりました。地元どんな作り手がいてどんな活動をしているのか興味はありませんか？どなたでもお気軽にご参加ください。



▶ 活動内容

当会に所属する作り手たちは普段はそれぞれに活動していますが、せんだいメディアテークの市民協働事業「メディアスタディーズ」に参加し、「映像サロン」というイベントを年に数回、不定期で開催しています。

映像サロンの主な内容としては、①「あるテーマについて、

会員作品の上映を通して参加者が意見を交わし、考えを深めるもの」と②「会員の制作途上の作品について参加者が意見を出し合い、制作者にフィードバックするもの」の2種類があります。映像を通して参加者と対話し、ともに学び合うための開かれた場を作るのが映像サロンの目的です。

▶ 代表の言葉

さまざまな立場の方が参加するみやぎシネマクラドルですが、当会の立ち上げの背景には、地元で映画を制作している作り手がお互いの存在を知ること、支え合い切磋琢磨できる環境を宮城に作るができないかという思いがありました。

立ち上げ以来のメンバーには、ドキュメンタリーを中心に、劇場公開や映画祭での受賞の経験のある映画監督、テレビで実績のあるディレクターなど、映像の世界で活躍する作り手たちが参加しています。活動を続ける中で、アニメーション作家や作曲家など、メンバーも多彩になっていきました。

当会では、そうして活動する作り手たちと、その志や活動を理解し応援してくれる市民が交流しながら、映像を通して人の生き方や社会、そして表現のあり方について考えるための場を

作っています。また「映画を作りたいけどどうしていいかわからない」「映画を作っているけど作り手同士の交流がない」「映画を作ったものの人に観てもらう機会が無い」といった悩みを抱える人たちが、気軽に情報交換するためのコミュニティとしても機能しています。

「cradle」(クレイドル)は邦訳すると「ゆりかご」という意味です。このプロジェクトを通して地元の作り手の活動を広くたくさんの人に伝えつつ、同時に対話や交流を重ねることで次世代の作り手や宮城の豊かな映像文化を育むことに貢献したい。これが私たちみやぎシネマクラドルの目指すところです。

みやぎシネマクラドル代表 我妻 和樹

電話： 080-2773-0181 (砂子)
メール： m.cinemacradle@gmail.com (我妻)
ブログ： <https://www.smt.jp/projects/cradle/>
フェイスブック： <https://www.facebook.com/miyagi.cinemacradle>



ブログ



フェイスブック

問い合わせ先
最新情報はこちら



メディア
スタディーズ

当プロジェクトは、せんだいメディアテークの事業「メディアスタディーズ」の一環として実施されています。

この用紙はリサイクルできます



MIYAGI CINEMA CRADLE

ドキュメンタリーが開く世界
みやぎシネマクラドルの10年とこれから

2015年の立ち上げ以来、せんだいメディアテークを拠点に映像を通して対話の場を作り続けてきたみやぎシネマクラドル。当会には地元ゆかりのドキュメンタリーの作り手が多く在籍し、それぞれがこの10年の間に独自のテーマと向き合いながら作品制作を続けてきました。

そしてこのたびの10周年にあたり、作り手たちが一堂に作品を発表することでご参加のみなさまと語り合う機会を設けます。それぞれがこの世界との関わりの中から発見した「確かな手触りを持つもの」を共有することで、今この時代にドキュメンタリーを作ることの意義と、映像を通してより良く生きるための方法をともに考える機会となれば幸いです。

開催日時

2025. 8月9日(土)・10日(日)

主催

みやぎシネマクラドル／せんだいメディアテーク

協力

i-くさのねプロジェクト

会場

せんだいメディアテーク7階スタジオシアター

※関連企画あり(詳細は中面をご覧ください)

● 申込不要・直接会場へ

入場無料

8/9 土

●各回、上映15分前に開場予定 ●各回上映後、監督によるトークがあります

プログラム A オープニング上映『10年後のまなざし』 10:00-12:10

「宮城の方々とともに震災10年という時間について考えたい」という思いの元に当会が制作したオムニバス映画。岩手が舞台の村上浩康『冬歩き』、福島が舞台の山田徹『あいまいな喪失』、宮城が舞台の我妻和樹『微力は無力ではない～ある災害ボランティアの記録』、海子揮一『海と石灰～仮設カフェをつくる～』の4作品からなる。

（2021 / 80分 / 監督：村上浩康、山田徹、我妻和樹、海子揮一）

プログラム B 新作上映『^{はる}杓かなる』＊バリアフリー上映 13:00-15:55



（2024 / 124分 / 監督：宍戸大裕）

長年障害や難病とともに生きる人びとの日常を描いてきた宍戸大裕の作品。徐々に全身の筋肉や呼吸機能が失われていく難病・ALS当事者の葛藤や当事者同士の心の繋がり、周囲の人びととともに生に向かって歩む姿を3年半に亘って記録。絶望と喪失の中、何が人を明日へといざなうのか。その根源的な問いと向き合う。

聴覚障害や視覚障害がある方でも鑑賞していただけるよう「バリアフリー字幕」と「音声ガイド」つきの上映となります。また監督トークには手話通訳があります。

プログラム C 特集上映「市井の人びとを撮り続けて」 16:20-18:25

長年テレビでドキュメンタリーを作り続けてきた小原啓が近年自主制作した4つの作品を上映。市井の人びとにカメラを向け続ける背景にはどのような思いがあるのか。テレビでの仕事も振り返りながら、宮城での映像制作にかける思いや現在の活動を聞く。



『炭とダイヤモンド』

（2019 / 21分 / 監督：小原啓）



『ブルーインパルスに魅せられた男』

航空写真家 黒澤英介

（2020 / 17分 / 監督：小原啓）



『ブルーインパルスとともに大空へ』

航空写真家 粒木友香里

（2021 / 12分 / 監督：小原啓）



『仙台最後の屋台 のれんを下ろす日』

（2022 / 22分 / 監督：小原啓）



宍戸 大裕

（ししど・だいすけ）

映像作家、仙台市出身。劇場公開作に、東日本大震災で被災した動物と人びとを見つめた『犬と猫と人間と2 動物たちの大震災』（2013年）、障害のある人たちの日々を描いた『風は生きよという』（2016年）、『道草』（19年）がある。2025年2月から『杓かなる』を公開中。クマと人のかかわりを描く映画制作のため、東京と岩手の2拠点生活を送る。

小原 啓

（おはら・さとる）

映像クリエイター、高知県生まれ。報道カメラマンを経てテレビディレクターに転身。二十数年に渡り情報番組やドキュメンタリー制作に携わる。代表作に遠洋マグロ船に単独乗船取材した『追跡！ニッポンのマグロ』など。2018年よりフリー。Motion Frame代表。



関連企画

映像サロン番外編

「地方に映像コミュニティを作ること」

18:40-20:00 会場 7階スタジオb

普段の「映像サロン」（裏面参照）の雰囲気や、会員それぞれにシネマクラドルに参加しての思い出や、映像を通して繋がり支え合うコミュニティを地方に作ることの意義について語ってもらいます。また、これから地元でどのようなことができるのかをみなさんと考えます。是非ご参加ください。

8/10 日

プログラム D 特集上映「故郷と震災」 10:00-12:20

東日本大震災前から宮城県南三陸町波伝谷で漁村の暮らしを撮り続けた我妻和樹。原発事故に揺れる福島県新地町で漁業者たちの苦悩を撮り続けた山田徹。宮城県石巻市大川出身で、震災による喪失を経験しながら映画を制作した佐藤そのみ。3人の作品を通して、被災した土地の営みとそこに生きる人びとの思いについて考える。



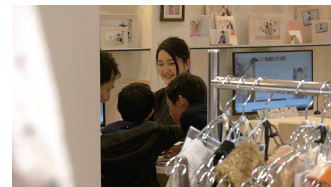
『^{はでんや}波伝谷に生きる人びと』(ショートバージョン)

（2012 / 32分 / 監督：我妻和樹）



『新地町の漁師たち』(ダイジェスト版)

（2016 / 10分 / 監督：山田徹）



『あなたの瞳に話せたら』

（2019 / 29分 / 監督：佐藤そのみ）

プログラム E 新作上映『あなたのおひとり』 13:00-15:25



（2024 / 95分 / 監督：村上浩康）

末期癌の父親が在宅介護で息を引き取る過程とそれを看取る母親の姿を、息子である村上浩康が記録した作品。身近な家族でさえも死に立ち会うことが難しい今の時代に、人間の命が消えゆく過程とそれを見送る家族、さらには在宅医療・介護職の人びととの交流を描いた本作を通して、「死」とは、「生」とは何かを考える。

プログラム F 新作上映『山の上のアジール』 15:50-17:40



（2025 / 60分 / 監督：海子揮一）

パンデミック拡大を防ぐため全国一斉休校となった2020年3月、子どもたちを受け入れようと山間の古民家で手作りの学校が生まれた。その「かんぶうざわ学級」の取り組みを海子揮一が描いた作品。学びとは、生とは何か…。人や自然と関わりあう人びとの姿を通して、リスク管理と自粛の空気に支配された私たちの社会を今こそ問い直す。

シンポジウム

「今、ドキュメンタリーを作る意味を考える」 18:00-19:30

今回、作品を発表した作り手たちにとって、ドキュメンタリーを作る動機やその魅力・可能性とは一体何なのでしょう？また撮影対象や社会や表現と向き合う上で大切なことは？改めて言葉にすることで、映像メディアが進化し、情報が飽和しているこの時代にドキュメンタリーを作ることの意義について考えます。

ゲスト | ^{やまうち あけみ}山内 明美 南三陸町出身。宮城教育大学教員。専攻は歴史社会学、社会思想史。著書に『増補版 こども東北学』、『痛みの〈東北〉論』などがある。

我妻 和樹

（あがつま・かずき）

1985年宮城県白石市出身。主な作品に、南三陸町を舞台にした長編ドキュメンタリー映画『波伝谷に生きる人びと』『願いと揺らぎ』『千吉里の空とマドレーヌ』など。みやぎシネマクラドルでは2015年の立ち上げから代表を務める。令和3年度宮城県芸術選奨新人賞（メディア芸術部門）受賞。



山田 徹

（やまだ・とおる）

東京出身。原発事故が発生した2011年3月以降、福島をフィールドに映像制作を行なっている。監督作に『新地町の漁師たち』（2016）、『あいまいな喪失』（オムニバス映画『10年後のまなざし』）の1本、2021）がある。



佐藤 そのみ

（さとう・そのみ）

1996年宮城県石巻市生まれ。2015年日本大学芸術学部映画学科に入学。在学中の2019年、故郷の石巻市大川地区で『春をかきねて』と『あなたの瞳に話せたら』を自主制作。2024年、2作が劇場公開される。新作に『スリーピング・スワン』（ndjc2024作品）がある。



村上 浩康

（むらかみ・ひろやす）

宮城県仙台市出身。2000年よりドキュメンタリー映画の製作・監督を続けている。主な作品に『流ながれ』（文部科学大臣賞）『東京干潟』（新藤兼人賞金賞）『蟹の惑星』（文化庁優秀映画）『たまねこ、たまびと』（2023キネマ旬報文化映画ベストテン第3位）など。新作『あなたのおひとり』を2024年9月より全国劇場公開。



海子 揮一

（かいこ・きいち）

1970年宮城県出身。建築家／プリコルル／クリエイター。大陸放浪の後に建築設計事務所を開設。自然と人との関わりを主題に、建築のほか映像制作、アートイベント企画、クラフト製作など多面的に活動している。自然に近い暮らしと創作環境を求めて、2018年から仙台に隣接する山中にある『寒風沢の家』にアトリエを置く。



関連企画

会場 7階スタジオb

みやぎシネマクラドルの会員が制作した映像を8/9・10(10:00-18:00)の間上映しています。

- 高砂市民センターでの「平日フェス」の記録映像
- 小原啓が制作した宮城の風景動画
- 岡部誠が制作したアニメーション など

是非お気軽にお立ち寄りください。